日本医史学雑誌　第59巻第3号（2013）　391–405

明治最初の翻訳看護書の原著解明と看護史上の意義

――田代基徳閲・岡田宗訳『看病心得草』（明治7年）――

平尾真智子

順天堂大学医学部医史学研究室

受付：平成25年3月14日／受理：平成25年6月21日

要旨：明治最初の看護書『看病心得草』は，所在が長く不明のままで内容を知ることはできなかった．今回，緒方洪庵の適塾門下生で江戸の医学所で学んだ田代基徳の資料から，わが国最初の医学雑誌『文園雑誌』第5冊（明治7年）の付録として掲載され，国会図書館に所蔵されていることが判明した．内容から原著はアメリカの医師Calvin Cutterの“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene (1852)”の最後の第49章“Direction for Nurses”であることがわかった．明治最初の翻訳看護書を田代基徳が出版したことで，幕末・維新期の適塾・医学所の存在は，新知識としての看護学への注視・導入の観点から看護史上重要であることが明らかとなった．

キーワード：看護史，『看病心得草』，田代基徳，翻訳看護書，明治期

はじめに

医史学者の石原明氏が雑誌『看護教育』の表紙「絵でみる看護史（71）」（昭和41年）で紹介した明治最初の看護書『看病心得草』（明治8年刊）[1]はわずか15ページほどの小冊子とされているが，国会図書館の蔵書目録や大学図書館ネットワーク上でも検索できず，長い間その所在は不明のままであり，記載された内容を知ることはできなかった．

今回，緒方洪庵の適塾門下生である田代基徳の資料から，本書が『文園雑誌』第5冊（明治7年刊）の付録として掲載されたものであり，国会図書館に所蔵されていることが判明した．本書の内容と原著を分析することで，わが国における近代看護学導入期の実情の一端とその看護史上の意義を明らかにする．

1. 田代基徳閲・岡田宗訳『看病心得草』の内容

(1)『文園雑誌』第5冊の付録『看病心得草』

『文園雑誌』[2]はわが国で最初の医学雑誌である．幕末・維新期に医学所[3]の教員をしていた田代基徳（1839–1898）の本宅にあった私塾修文舎（東京下谷練塀町53番地）による発行である．『文園雑誌』の名前の文園とは田代のことである[4]．明治6年6月から明治7年2月までのわずか9ケ月間に第1輯，第2輯，第3冊，第4冊，第5冊の5冊が発刊されている．この書の主旨として東京日日新聞（明治6年12月16日）の広告には「百般ノ学科及ヒ医事ニ関係スル所ノ新説ヲ抄録シ且傍ラ避郷師友ニ乏シキ徒ノ質問ヲ受ケ之ヲ答譯セント欲スル者ナリ」と記されている．

『文園雑誌』第1輯の田代による序文には「吾社友相謀リ，学課ノ書中ニ就テ，其説ノ事実ニ益アル者ノミヲ抄訳ス」とある．記事の内容は麻疹，皮下注入法，嘔吐，貧血，検尿ノ方法，中毒，胃

中消化，吸収，同化，滋養，動脈，静脈，毛細血管，呼吸，乳汁，月経，死体検査法などの人体生理，病気，症状，検査法，治療法と医学全般にわたる29編であり，それぞれの表題には1番から番号が付されている．著者は宇多晦蔵，伊藤謙，杉山由哲，など20名で，『文園雑誌』の広告に「此書ハ田代家塾学徒ノ訳稿ヲ採録刊行スルモノ」[5]とあり，修文舎の学徒である．『文園雑誌』の第5冊（明治7年刊）の付録に第30号田代基徳閲・岡田宗訳『看病心得草』がある．

(2) 翻訳者岡田宗の人物像

『看病心得草』の翻訳をした岡田宗の人物的な背景として，田代の発刊した『医事新聞』の病体解剖社定員追加の欄（明治11年）に，「岡田宗 埼玉県下川越本町10番地」と掲載されている[6]．また田代の修文舎に設けられた医学院の会員名簿（明治12年，明治15年）に「医士　岡田宗」とある[7]．『文園雑誌』は田代家塾学徒の訳稿を採録刊行したものであることから，岡田宗はその学徒の一人である．

岡田宗の医師としての経歴に，明治31年の『帝国医籍宝鑑』の「従来開業医」の部，埼玉県の欄に「岡田宗　入間郡川越町」の記載がある[8]．このことから，それまでの修学・開業履歴により，明治16年以前に埼玉県から医術開業免状を授与され，明治17年からの「医籍編製」に伴い同免状を返納し，新たに菊花紋章入り内務省免状が下付され，医籍に登録されたと考えられる．川越本町に医師岡田宗と掲載されていることは明治35年の『埼玉県営業便覧』[9]で確認できたが，明治42年刊行の『日本杏林要覧』の「入間郡」の欄にその名前をみつけることはできなかった．そのため，同年の時点では既に死亡していたか，あるいは他所に転居していた可能性もある．なお大正15年刊行の『日本医籍録（第二版）』に「岡田宗」の名前は掲載されていない[10]．国会図書館の蔵書検索において岡田宗の名前による著作は検索されないことから，本書の翻訳が唯一のものと想定される．

岡田は埼玉県の従来開業医でありながら，田代の私塾で英語や西洋医学，病体解剖，などの新しい医学，そしてそれに伴う新しい看護法を学ぶという意欲のある，進取の気鋭に充ちた医師であったと考えられる．

(3)『看病心得草』の内容

本書は縦22 cm，全15頁の小冊子である．表紙（写真1）には書名，田代基徳閲・岡田宗訳，そして久壽理，一日量という紙の貼られた薬瓶が描かれている．題辞（写真2）は田代によるもので，「病気のとき看護法がよくなければどんな名医，妙薬であってもその効験は少ないので本書を頒行する」と出版目的が述べられている．本文は行書，漢字平かな文，振り仮名付である（写真3）．内容は，看病の知識の必要性，「湯浴」，「食物」，「空気」，「病室温度」，「静謐」，「代人心得」となっている．

最初に「看病心得草　文園雑誌第五冊付録　第三十号　田代基徳閲　岡田宗訳述」と記されている．本文文頭の看病の知識の必要性のところには小見出しはなく文章のみであるが，「夫れ看病の道は内外医の病人を取扱う如く大切にこの意を会得して勤むべし．但し女は気質及習わしとしてわずかの間も怠ることなければ自然に看病によろしとす．総て男女老少強弱によらず伝染病の時又は寒暖の変化などにて常に病を受け易し．夫故母も娘も看病の道を十分に学ぶこと緊要なり．また女にしてこの道を知らざるは女にあらず．然れども医道の如く之を教ゆる学校のなきは実に嘆くべきことなり．このひけめを補うには只養生学の法則に従い又次に記載す病人の取扱方に注意すべし」と書かれている．

以下につづく文章には「湯浴」，「食物」，「空気」，「病室温度」，「静謐」，「代人心得」という6つの小見出しがついている．記載内容の概要は次のとおりである．

湯浴……病人を湯浴みさせる前に看病人は水・手拭・海綿・フランネル・敷物を備え室温にも気をつける．病人が弱いときは冷水ではなく温湯を用いる．湯浴み前にラシャを寝床に敷き蒲団の湿るのを防ぐ．最初は体の一部から洗いその後に全

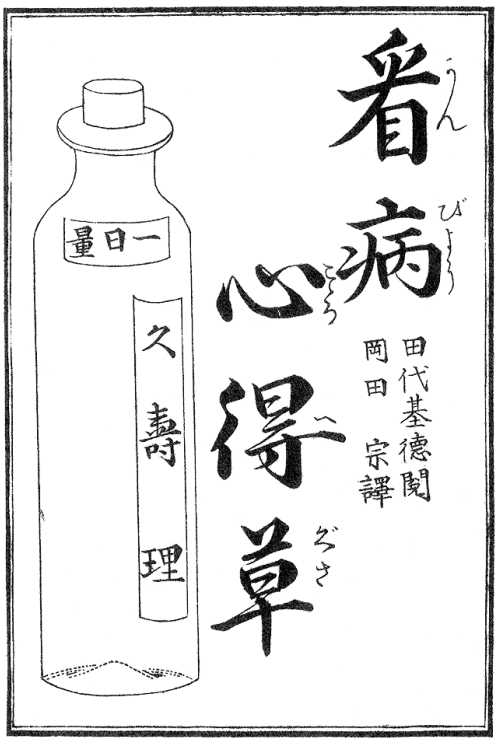

写真1

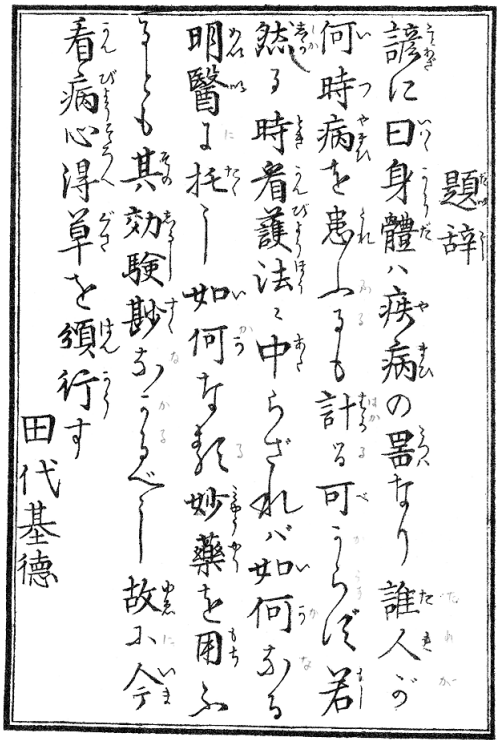

写真2

身をあらう．浴後は乾燥した手拭で湿り気のないように注意して拭く．一昼夜に二三度全体を浴す．浴は体の衰えぬ頃をよしとする．温めた酒，カンフラ，酢などで湿した手拭いで拭くのは不快である．

食物……料理は女の勤めである．病人の食物は常に注意し清浄に作り医者の言いつけを受けて禁じたり減じたりして薬の用法と同様に気をつける．病人が回復するときは食欲が強くなる．医師の命に従い料理の時間，分量に注意することが肝心である．

空気……毎朝清浄なる空気を病室に入れる．日中もたびたび心がける．病人に風がすぐに当たらぬように気をつけ，着物・蒲団は日々乾かしたびたび交換する．

病室温度……自然にまかすべきではない．部屋ごとに寒暖計を備えほどよき温度とする．

静謐……病室では騒々しいことをしてはいけない．病室に友や家族を多く入れること，声だかに話すことは禁じる．戸や蝶番の音も避ける．病人の食事，睡眠，寝室はすべて健康なときの習慣に従う．体よりでる老廃物である汗を取り去ることは大切である．健康なときのように除くようにする．看病人の容姿は穏やかで病人の心を安んじ精力のつくように心がける．友人の病，死去した人の話は病室ではしない．看病人は患者の回復，生死の恐れを容貌言語に表してはいけない．医者より知らせなさい．看病人は6時間より長く病室にいてないけない．食事の分量，睡眠時間に注意し戸外にでて運動をすべし．そのあいだ代人を付け置き静かに病室をでなさい．この法則に従えば看病人が病気を受けることは稀である．

代人心得……看病人同様病人の前では気色よく懇ろに心を用いなさい．病室に入る前には簡単な食事をし，夜間もまた軽いものを食べなさい．寒いときに夜伽をするときはなるだけ温かい衣服を着なさい．また看病するにはまず衣服の色にも気をつけなさい．特に伝染病には特別に注意しなさい．黒い色の濃いものは白き薄い色よりも病体よりでる気を速く吸い取ることを発見した．夜中に

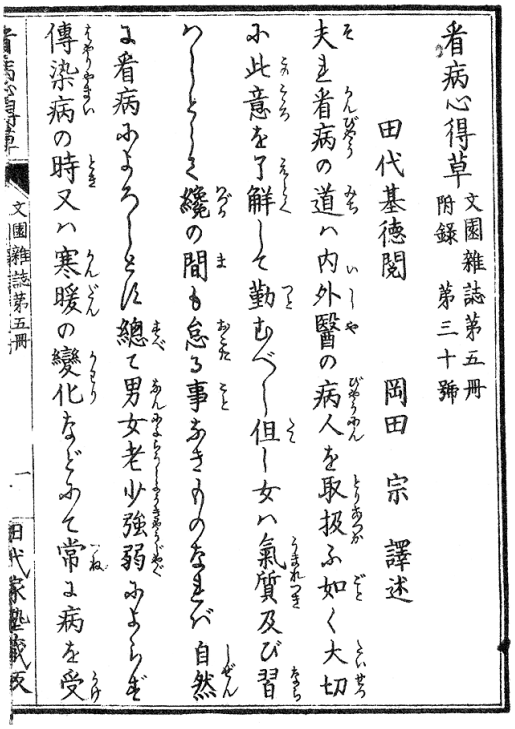
看病心得草 文園雜誌第五冊 附錄 第三十號
田代基德閲　岡田宗譯述
夫れ看病の道は内外醫の病人を取扱ふ如く大切
ゝ此意を了解して勤むべし但し女は氣質及び習
ひ性なる纔の間も怠る事あきらのをもとゝ自然
と看病みよろしきを總て男女老少強弱みよりを
傳染病の時又は寒暖の變化などみて常と病を受

写真3

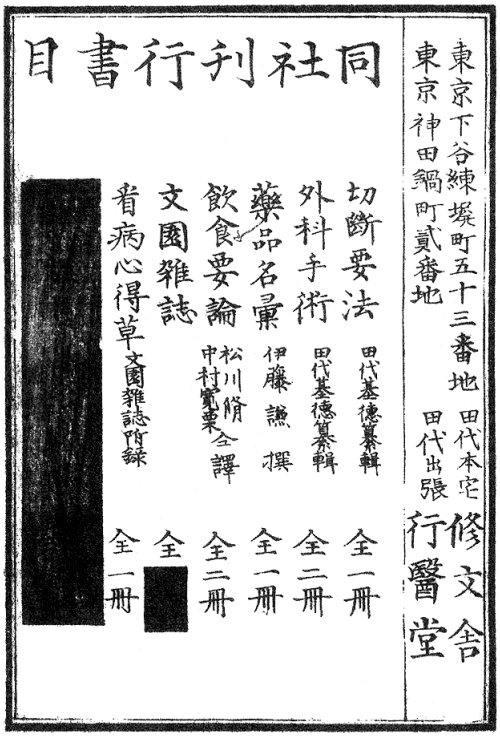
東京下谷練塀町五十三番地 田代本宅
東京神田鍋町貳番地 田代出張
修文舍
行醫堂
同社刊行書目
切斷要法 田代基德纂輯 全一冊
外科手術 田代基德纂輯 全二冊
藥品名彙 伊藤謙撰 全一冊
飲食要論 松川脩 中村寛要合譯 全二冊
文園雜誌 全
看病心得草 文園雜誌附錄 全一冊

写真4

患者に必要な品物は親類が寝室に退室する前に看病人は病室または近くの部屋に調え置きなさい．代人も看病人と同様におしゃべりをしてはいけない．百姓や職人のように日中仕事のあるものはその疲れから十分に看病を勤めることは難しい．それゆえ友達の親切な助けにより，その費用を省くとしてこの道に慣れない代人を頼むよりは，他に慣れた人を雇うことのほうがかえって利益のあることである．

本書の奥付は修文舍発行の書籍の広告となっている（写真4）．

2.『看病心得草』の原著解明と日本での翻訳

(1)『看病心得草』の原著の解明

『看病心得草』の内容は松山棟庵による翻訳書『初学人身窮理』の「看病人ノ心得ノ事」と類似していた．『初学人身窮理』はアメリカの医師カルヴィン・カッターの本，“First Book on Anatomy, Physiology, and Hygiene For Grammar School and Families”（1854）の翻訳であることは知られていた[11]ので，原書の内容と『看病心得草』の内容と比較してみた．その結果，ほとんど同一であるが『看病心得草』の方には追加されている文章があり，全く同一ではないことがわかった．そこでカルヴィン・カッターについて調べてみると彼にはもう1冊“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene. Designed for Colleges, Academies, and Families.（1852）”という本もあることがわかった．こちらを読んでみたところ，全く同一の文章があり，この本の翻訳であることが判明した．

『看病心得草』の原著はアメリカの医師カルヴィン・カッター（Calvin Cutter, 1807–72）の“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene. Designed for Colleges, Academies, and Families.（1852）”（以下，Treatiseとする）の最後の章，第49章“Direction for Nurses”である．本書は国会図書館に所蔵されている．“Treatise”は，本文438頁，147図からなる．大学生・専門学校生用の解剖・生理・衛生書である．骨，筋肉，歯，消化器，循環器等に分けて，その解剖，生理，衛生について全49章，

問答形式で構成している．各段落には番号が付されていて，その数は通し番号で1から1027までとなっており，質問項目にも同じ番号が付されている．最終章は“Direction for Nurses”となっており，通し番号は1002～1020，後半部にはDirection for watchersのタイトルが付けられ，通し番号は1021～1027となっており，全部で看護に関する段落は26となっている．

『看病心得草』は，最終章の第49章“Direction for Nurses”の全訳である．後半部のタイトルDirection for watchersは「代人心得」と訳されている．原文にある通し番号はない．最終章だけ小冊子として発刊されたため，発刊の理由が田代による題辞に記されている．題辞には「看護（かんびょう）」が使用されているが，本文ではすべて「看病」となっている．

冒頭では看病人に教育の必須なることを訴えている．これは1850年代のアメリカの状況のことを述べているのであるが，このことは1870年代の日本も同様であった．アメリカで看護教育が行われるようになるのは南北戦争後の1872年のことである[12]．イギリスのナイチンゲール看護学校は1860年の開校であるが，アメリカは南北戦争があり開校が遅れている．つぎに具体的な看護法として「湯浴」，「食物」，「空気」，「病室温度」，「静謐」の5項目が記されている．ナイチンゲールの看護書『看護覚え書』は1859年の発行であり，1860年にはアメリカでも発行されている．カッターの本は1850年代初頭の発行であり，看護を記載した医学書として先駆的な意味をもつものと思われる．本の看護の内容は，在宅で家族が看護を行うことを想定している．アメリカにおける本格的な看護書は1870年代後半に発行されたベルビュー看護学校やコネチカット看護学校の“Hand Book of Nursing”である[13]．

(2) カッターの2書籍の日本での翻訳

“Treatise”は，小林義直訳『カットル氏生理養生論』（明治13年初版）として全訳されている．本書は第1編「総論」から第49編「看病ノ方」で構成されている．全572頁で通し番号も付されている．原文の段落で大文字となっている小見出しには◎が付されている．最終番号は1026となっており，原文にある1027は訳されていない．また原書にある質問項目の翻訳はない．後半部のDirection for watchersは「夜間の看護方」と訳されている．訳者の小林義直は医師，医学者で文久3年には田代と同じ医学所で学び大学東校・文部省・内務省につとめ退官後は藩校誠之館教授となり，多数の医学書，翻訳書を著している[14]．

“Treatise”の一部は土岐頼徳によって『啓蒙養生論』（全5冊）として明治5年に抄訳されている．挿図に登場するのは和服姿の日本人である．第49章は取り上げられていないが，産婆学校のテキストとして用いられた．土岐は江戸の坪井信良らに学びついで幕府の医学所に入り，明治7年には田代らとともに陸軍軍医となり，西南戦争，日清戦争に従軍し，明治28年には軍医総監となった人物である．医学所，軍医と田代の近くにいた人物である[15]．

カッターには，前述のように“First Book on Anatomy, Physiology, and Hygiene For Grammar School and Families”（1854）（以下，First Book）という本もある（国会図書館蔵）．本文169頁，83図，現代では中学生程度を対象とした解剖・生理・衛生書である．骨，筋肉，歯，消化器，循環器等に分けて，その解剖，生理，衛生について全36章，問答形式で構成している．“Treatise”の縮約版といった体裁である．各段落には番号が付されており，その数は通し番号で1から527までとなっている．また段落に対応した質問項目も付されている．最終章は“Direction for Nurses”となっており，通し番号は503～521，後半部にはDirection for watchersのタイトルが付けられ，通し番号は522～527となっており，看護に関する段落の総数は25である．

“First Book”の抄訳本として，松山棟庵・森下岩楠訳で松山氏蔵版『初学人身窮理』（明治6年刊）がある．松山は医師で福澤諭吉の慶応義塾医学所の設立に尽力した人物である．総論を含め全17章，上・下2巻で構成され，文体は漢字カタカナ混交文である．原書の通し番号と質問項目は訳されていない．第17章は目次では「看病人ノ心

得ノ事」という訳になっている．後半部のDirection for watchersの訳出はない．初等教育のための啓蒙衛生書であり，夜間の看護についての知識は必要ないと判断されたと考えられる．

“First Book”の全訳本として伊藤正信訳，東洋館蔵版『喝氏初学人身窮理』（明治14年刊）がある．全36章で構成されている．漢字カタカナ混交文で書かれている．各段落の通し番号は1～527まで付されている．原書にある質問項目も忠実に翻訳している．第36章のタイトルは「看病人ノ心得」であり，通し番号は503～521で，後半部のDirection for watchersは「夜間患者ノ護ルモノ所謂夜伽ノ心得」となっており，通し番号は522～527となっている．

“Treatise”の第49章“Direction for Nurses”と“First Book”の第36章“Direction for Nurses”は同タイトルであるが，内容に若干の差異がある．それは前者では段落の方がひとつ多いのである．その前者にだけある段落は「代人心得」のなかの「看病をするにはまず衣服の色をも気を付けるべし．殊に伝染病には別して注意をすべし．試験して黒き色濃き色は白き色薄き色よりも病体より出る気を速に吸取ることを発明せり」という記述である．

3. 原著の著者カルヴィン・カッターと同時代のアメリカの医学と看護

(1) カルヴィン・カッターの人物像

カルヴィン・カッター（Calvin Cutter, 1807–72）の人物については，電子版の資料[16,17]がありそれらをまとめるとつぎのようになる．なお彼についてはアメリカのダートマス大学の図書館に修士論文として伝記がすでに存在している．その文献はHerbert E. Shepard, Calvin Cutter: Zealot on the Path of Justice and Reform. 1807–1872, 1982.であるが，館内閲覧のみであり，実見できていない．

カルヴィン・カッター，M.D.　彼は1807年5月1日に東部ニューハンプシャー州のジェフリー（Jaffrey）で生まれた．彼はボードイン，ハーバード，ダートマスカレッジで医学の講義を受け，1832年にダートマスから医学で卒業した．ニューハンプシャー州のロチェスターで1832年から1833年まで診療した．その後ヴァレンタイン・モットM.D.の個人的な弟子となった．ナシュアに居住しここで数年診療した．そして再び診療をやめフィラデルフィアのマクレアン医師の弟子となった．つぎにドーバーで1838から1841年まで診療をした．1842年から1856年の期間に合衆国の29の州を訪問し，出張して医学講習を行なった．1847年彼は学校やカレッジのためのテキスト「カッターの生理学」の編集を始め，J.B. Lippincott社から衛生啓蒙書のシリーズとして出版し，衛生思想の普及に力を注いだ．このシリーズは1871年までに50万部が販売された．それはいくつかの東洋の言語に翻訳された．そのなかでこの“Treatise”と“First Book”の2種の衛生啓蒙書はベストセラーになった．

1861年8月，南北戦争時，第21マサチューセッツ歩兵団に志願して外科医となり，第9陸軍師団の医療班の外科医主任となった，彼は2度負傷した．彼は1872年6月20日マサチューセッツのウォレンで死去した．彼の妻はユーニス・ナイ・パワーズといい，インディアンと闘い，独立戦争，南北戦争を闘った名門に生まれ，旧い教養を身につけた人である，とされている．夫妻の墓はマサチューセッツのウォレンにある．彼の娘キャリー・カッター（Carrie Cutter, 1842–1862）も南北戦争でナースとして傷病兵の看護に尽したが20歳を目前に亡くなった．その功績を讃え，戦没者の記念碑にその名が刻されている[18]．

彼の息子ジョン・カッター（John C. Cutter, 1851–1909）はハーバード大学医学部を卒業した多才な医学者である．1878（明治11）年9月，札幌農学校教師として来校し，生理学，解剖学，獣医学，水産学及び英文学を担当，開拓使の札幌病院顧問としても功績があった．1887（明治20）年1月にアメリカに帰国した[19]．

(2) カッターの医学書が著された19世紀前半のアメリカの医学と看護の状況

ダフィーの『アメリカ医学の歴史』[20]によると，19世紀前半の南北戦争以前のアメリカでは医師

の教育は徒弟制が主流で医学校の数は少なかった．開業医になるためには，指導を受ける医師に年間100ドルの授業料を払い1～5年間師事するのがふつうであった．徒弟制と医科大学が両立していけたのは大学側が臨床教育を実施しはじめるまでであったが，臨床教育が発展したのは南北戦争が終わってからのことである．1800年当時は小規模な医科大学が4校だけで1807年に2校が加わり，1810年から1840年までに26校の医学校が設置された．教育期間は短かった．

医師免許の認可には医学の学位の取得か，認可試験の受験という制度が一般的であった．州に医師免許法令はあっても不服従に対する処罰を規定したものはほとんどなかった．1847年のヴァージニアの開業医を対象とした調査では医学の学位も免許もない者が約4分の1もいることが明らかになった．アパラチア以西の新しい州では推定で約半数の開業医が正式な免許状を持っていなかった．このような状況のなかで医学教育を改善したり専門職としてある程度統一を求める要求がアメリカの医師に高まった結果，1847年にアメリカ医師会が結成されることになった．

アメリカの看護史家ドランの『医療・看護の歴史』[21]によると，19世紀，病人のケアは母親の責任となり，愛情のこもったケアは家族同様友人にも与えられた．花嫁は必ず料理の本を持ち，その本には病人の応急手当へケアに関する一章が入っていた．患者の自宅で与えられるケアは病院で与えられるものとは非常に異なっていた．非常に貧乏な人とか家のない人だけが病院に行き，家庭でケアしてもらえる人は誰も病院へは行かなかった．社会的地位のある人は自分の親戚を病院へ入れることを恥とした．家族のなかでは母親が病人の面倒をみた．隣人たちはすすんで「寝ずの番」（原語 night watcher）をし，不慣れではあったが，この寝ずの番をする人によって投薬と新しい症状の報告が確実に行なわれた．当時は助産術の心得のある「産褥」（産科）看護婦は大勢いた．

19世紀前半の病院の患者は無一文で家も友人もいないのが普通であり，大抵の私立病院では，一般に50歳以上，多くは70歳，80歳になっている収容者の手で看護が行われていた．良い病院看護が行われている唯一の例外はキリスト教系宗教団体の修道女によって行われているものであった．南北戦争当時アメリカにはわずか68の病院しかなかったが，1872年には178病院が存在していた．アメリカで看護教育が行なわれるようになったのは南北戦争後の1870年代になってからである．

4.『看病心得草』を発刊した田代基徳の人物像と著作活動

(1) 田代基徳の人物的背景

田代基徳の人物史研究については，田代信徳『田代基徳年譜』（昭和16年）[22]，②芝哲夫「579 田代基徳」[23]，③川嶌眞人「田代基徳―明治初期の医学教育界・軍医界で活躍した外科医」[24]が代表的なものである．これらのうち，①は昭和16年に医学雑誌『外科』に2号にわたって掲載されたもので，この年譜の寄稿者は田代の嫡孫田代信徳，編集したのは田代の孫キク子の夫で東京帝大の歴史学者辻善之助である．年譜の根拠となる文献や田代の長女春子，田代の身近にいた産婆・看護婦の杉浦いと子[25]の話も採用されているため信頼性があり，田代の人物像の源泉となっている．②は適塾記念会の芝哲夫氏による「適塾門下生に関する調査報告」の一部であり，田代信徳の子孫に実際に面会して得られた資料を基礎に記述されている．③は田代の出身地である大分県中津市在住の医師川嶌眞人氏によるもので，田代と高木兼寛との関係など最新の研究成果が掲載されている．それらをもとに田代の人物像を概観するとつぎのようになる．

田代基徳は，天保10（1839）[26]年4月15日，豊前国中津藩の藩医松川修山の子として生れ，従兄の田代春耕の家を継いだ．幼名は泰二，後に一徳，さらに基徳と改める．太楽と号した．安政4（1858）年に筑前国秋月の江藤養泰に入門して漢方医学を学んだ．翌年肥後山鹿町の武藤璋禮について，賀川流産科・杏蔭流整骨術や華岡流外科を学んだ．

文久元（1861）年大阪に出て，4月18日緒方洪

庵の適塾に入門し，按摩で生活費を捻出しながら蘭学を勉強した．文久2（1862）年8月，洪庵が幕府西洋医学所頭取として江戸に赴任すると，文久3（1863）年江戸に到り，5月に医学所に入門した．同年6月に洪庵が死去すると，後任に松本良順が就任した．松本が医学書以外の兵学書などを読むことを禁止したのを不服として足立寛らとストライキを始めたが，同郷の先輩福沢諭吉にたしなめられ中止したという一幕もあった．元治元（1864）年2月医学所句読師を拝命する．蘭学と数学を教えた．慶應元年軍艦蟠龍の軍医となり，慶應3（1867）年医学所塾監を命じられる．

慶應4（1868）年，鳥羽・伏見の戦役で幕府軍が敗れると，当時の幕府医学所頭取松本良順は数名の生徒をつれて浅草今戸の寺に病院を開設し，大阪から来る伏見戦争の負傷者を収容して負傷兵の治療にあたったが，薩長軍が江戸に近づいたために東北に脱走した．このとき田代は閉鎖されるまでこの幕府の病院に留まった．同年6月新政府は旧幕府の医学所を復興し，横浜の軍陣病院を江戸の旧藤堂邸に移し大病院とし，医学所と大病院と合併して医学校兼大病院という新組織にした．ここで田代は医学校の医学助教試補，三等教授となる．この年に『切断要法』を刊行する．明治元年より下谷練塀町に居し，自宅に私塾修文舎（後の医学院）を開いて諸学を教授した．また横浜・前橋等に行医堂を創めて診療に従事した．明治2（1869）年医学校が大学東校と改称されると中助教となり，明治4年には文部省出仕となっている．明治5（1872）年大助教となる．明治6（1873）年には『外科手術』を出版，私塾では英書で医学を教授した．本邦における最初の医学雑誌『文園雑誌』を創刊するが明治7年には廃刊し，後続誌として明治11年『医事新聞』を発行した．

明治7（1874）年より陸軍に出仕し二等軍医正となった．明治8年4月には松本順などによるわが国最初の医学会ともいうべき東京医学会社の結成に在官の医師の一人として参加し，幹事6人のなかの一人となっている．明治10（1877）年2月には近衛第二連隊に属して西南の役に従軍した．同年，下谷区練塀町の自宅に軍医たちとともに病理解剖と外科技術の修得を目的とする病体解剖社を設立した．その剖検結果を『医事新聞』に掲載，病理解剖は明治13年まで行なわれた．明治13年陸軍病院往診課長を併任する．同年，高木兼寛による英国医学派の研究組織「成医会」に慶応義塾医学所関係者の一員として結成に参加，4人の幹事のうちの一人になっている．明治14年には成医会の会員として施療病院創設有志会に参加し，8名の創設委員のうちの一人となっている．明治17年一等軍医正に昇任する．

明治24（1891）年には田代病院を設立した．明治25（1892）年には陸軍軍医監，陸軍軍医学校長（第6代）に任ぜられた．軍医学校機関紙『陸軍軍医学校』を創刊した．明治26年休職する．明治28年日清戦争の勃発に伴って，第三・四の二師団の留守部隊の軍医部長を歴任した．同30年官制変更により陸軍一等軍医正と改称された．日本の外科学，軍陣医学の発展に大いに貢献し，明治31年3月23日60歳で病没した．遺言により，翌24日東京大学病理学教授三浦守治らにより病理解剖に付された．墓地は谷中天王寺にある．妻は幕臣戸矢直賢の長女千代子，一女春子がいる．足利の人田部井又助を養子とする．養子田代義徳はわが国初の整形外科の講座を東京帝国大学に開設した．

（2）田代基徳の著作・翻訳・校閲に関する活動

国会図書館には田代基徳の著書1冊，翻訳書2冊，校閲書6冊の計9冊が所蔵されている．これらのうち『切断要法』と『外科手術』以外の書籍は上記の田代年譜には未記載である．それらを年代順に整理すると以下のとおりとなる（便宜上番号を付す）．

①『切断要法』[27] 田代一徳訳，山城屋佐兵衛，慶應4年．
②『保寿新論』[28] 田中則敏抄訳，田代基徳閲，英蘭堂，出版年は不詳．
③『外科手術』[29] 上・下，田代基徳著，島村利助，明治6年．
④『飲食要論』[30] 上・下，有満（ユーマン）著，

中村寛栗，松川修訳，田代基徳閲，蜩笑社，明治7年.

⑤『牛痘弁論』[31] 林義衛述，田代基徳閲，島村利助，明治9年.

⑥『動物及び人身生理編』[32] ウィルレム・チャンブル，ロベルト・チャンブル著，田代基徳訳，『百科全書』3，文部省，明治9年．に所収.

⑦『造化生生新論』[33] 上・中・下，エルトン述，古矢嘉満子記，田代基徳閲，正栄堂，明治12年.

⑧『民間養生説約：小学生用』[34] 村山義行，田代基徳閲，惇信社，明治13年.

⑨『学徒衛生運動要訣』[35] 田上耕助編，田代基徳閲，明治21年.

この他に雑誌として，『文園雑誌』田代家塾（明治6年～明治7年），『医事新聞』医事新聞社（明治11年～昭和5年）の2種が所蔵されている.

5. 明治最初の翻訳看護書『看病心得草』の看護史上における意義

(1) 田代基徳の語学力と医学教育者としての側面

田代は適塾で蘭学を修め，医学所で句読師をしている．句読師とは本来は漢文の素読を教える教官のことであるが，一般的に読み書きを教える人，のことをいう．彼は医学所で蘭学と数学を教えており，オランダ語を教授する語学の能力は優れていたと思われる．また慶応4年6月以降，医学所が新政府軍の医学校兼病院となり，明治2年1月20日から1年契約で院長が英国人医師ウィリス（William Willis, 1837–1894）になると，ウィリスは市井の患者を診療し，医学校の学生に講義を始めている．田代はここで英語と英国医学に接している．ウィリスが医生に英語を教授した事実は公文録にも記され，ウィリスの遺産のひとつとされている[36].

田代は明治元年に自宅に私塾修文舎を開いて医学生を養っている[37]．その学徒数は明治4年には50名を数えていた[38]．明治11年にはこの私塾に医学院を創立した．その主旨として「邸内ニ一宇ヲ建築シ医学院ト名ク茲ニ於テ医学専門ノ会議ヲ開カント欲ス」とある[39]．明治14年の医学院概則によると，主旨は「百般ノ事業苟モ医学ニ裨益アルモノハ勉メテ其端緒ヲ開キ斯道ノ程度ヲ上達セシメント欲スルニ在リ」とし，院内には医学専門会，病体解剖社，医学図書局，医学博物局，修文舎，行医堂，薬物器械局，編輯局，医事新聞社の9課を置くとし，会員とは医学専門会及び病体解剖社等に出席する者の総称となっている[40]．明治14年12月1日より修文舎の規則改正があり，本舎の目的は「一ハ学士ヲシテ医術開業免許ヲ得ルノ資トナス，又一ハ開業医ノ余暇ヲ以テ随意ニ復習スルノ便ニ供スルトノ二途ニ在ルナリ」とされた．修学期間は三年である[41]．明治15年の医事新聞には雑報に医学教授として，東京には大学医学部のほかに，済世学舎（長谷川泰），東亜医学校（樫村清徳），好寿医院（高階経本），予備医学校（佐藤精一郎），そして修文舎，の5校[42]があげられており，修文舎は私営の医学教育機関の一つとして位置づけられている.

修文舎において田代は英書で医学を教授している．そして実際に学徒とともに英語文献の翻訳を行い，その一部を『文園雑誌』に掲載した．その学徒の一人が『看病心得草』を翻訳した岡田宗である．田代はオランダ語のほかに英語の知識も有していた．翻訳の校閲（明治7～13年）を多く行い，校閲書のほうが自著や翻訳書に比し多くなっている．校閲とは文書・原稿などに目を通して正誤・適否を確かめる作業のことで，翻訳者以上の知識・文章力が必要とされる．校閲が多いことからも後進を育成する，田代の教育者としての側面を知ることができる.

田代は同じ中津藩出身で同じ適塾出身の先輩であり，江戸で英学塾を開設した福沢諭吉（1835–1901）と懇意で福澤も田代の家を訪問している[43]．福澤は1860年，1862年，1867年と3度外国に行っている．このうち初回と3度目はアメリカに行っており，特に3度目の帰国後には「今度はあらんかぎりの原書を買ってきました．そこでその当分十年余もアメリカ出版の学校読本が日本国中に行なわれて居たのも，私が始めて持って帰ったのが国縁になったことです」[44] と述べている．アメリ

カでベストセラーとなっていたカッターの啓蒙衛生書2書が福沢の近隣にいた田代基徳，松山棟庵，土岐頼徳といった医師たちによって訳されたことからも，本書を持ち帰ってきたのは福澤である可能性が高い[45]．福沢は松山棟庵に「蘭学を習熟しているのだから英文を読むことは雑作のないこと」[46]と語っており，オランダ語の文法を熟知していれば英語の習得も雑作なくできるととらえている．松山棟庵はカッターの“First Book”の方の抄訳を行ない，小学生向けのテキスト『初学人身窮理』（明治6年）はベストセラーになっている．

明治初期に大翻訳時代があり，15年間に数千点の書籍が翻訳された．翻訳数が多いのは医学，工学技術，農業技術，法律などの実学の分野である[47]．明治5年は東京府の英学塾開設の最盛期であった．この年は福澤諭吉の『学問ノススメ』が出版され，学制が発布された記念すべき年でもある．明治7年の東京府所在英学塾は122もあった[48]．

田代基徳についてはこれまで陸軍軍医の経歴で語られることが多かったが，「病体解剖社」について研究した石出猛史は，田代の経歴を一言で表すなら，軍医というよりも「医学教育者」が適当であろう，と述べている[49]．また田代自身も「俺は医者をつくる医者になる」[50]といっている．医史学者の蒲原宏氏は田代を，養子田代義徳を帝大医学部初代の整形外科学講座教授に育てた[51]，と評している．小説家の司馬遼太郎は田代を「冒険も創造もない人生を閉じた」[52]と表現しているが，教育という地味ではあるが着実な人材育成という側面で創造的な人生を送った人物といえるのではないだろうか．

（2）西洋の新知識としての看護への関心

田代基徳はその主著が外科学書であり，外科医である．外科の技術を身につけるため解剖も行なっている．西洋医学による医療を実践するにあたり，いちはやく看護を注視し，医療における看護の重要性を認識，日本の医療者に向けて英書の翻訳ではあるが，看護の単行本を出版した．時代の動向をみる先見性がある．田代は『看病心得草』の題辞で，「病気のとき看護法がよくなければどんな名医，妙薬であってもその効験は少ない」と述べており，医療における看護の力に気づいている．

石原氏による『看病心得草』の紹介記事には，明治8年に田代修文舎から出版された木版本，定価6銭2厘5毛，とある．また翻訳書専門店である島村利助の英蘭堂（東京馬喰町二丁目五番地）の明治8・9年頃の発刊目録には122冊の医学書が紹介されているがそのなかに唯一の看護書として，「看病心得草　岡田先生訳田代先生閲　六銭二五　全一冊」があげられていることから[53]，単品で販売されていることがわかるが，出版部数は不明である．

田代は小学生向けの看護書『民間養生説約：小学生用』（明治13年刊）の校閲もしている．これはアメリカの家政学の先駆者キャサリン・ビーチャー（Catharine E. Beecher, 1800–1878）の本とカットル（カッター）の医学書の両方を取り入れており，看護の内容はより豊かになっている．田代の主たる翻訳編著書は外科書であるが，校閲した書籍には保寿，飲食，看護，妊娠・出産，小児，養生，運動など健康に関する書籍が多く，これらのことから人間の健康に幅広く関心を持っていたことが考えられる．

田代は明治11から13年にかけて田代塾に東京産婆会というものを設け，産婆の教育も実施している．これは田代が西洋産婆の必要なこと，国の基礎は産婆の良否にかかわる事大なりという達識に基づいてできたもので，当時の著名な産婦人科医である桜井病院長，榊順次郎，濱田病院長も来講した，とされる[54]．年譜で田代の思い出を語った杉浦いと子はここで産婆学を学んでいる．田代は医学所で西洋医学を学ぶ前に賀川流産科を学んでおり，産科にも関心があったものと思われる．明治12年に校閲した『造化生生新論』は妊娠・出産など産科領域に関する西洋医学の内容である．

田代はまた明治15年医師の研修会で「欧州医制略説」[55]という講演を行っている．この講演は家塾の生徒に口述したものとしている．そのなかには，医士，調薬士，獣医，産婆，歯医，看病人，看病尼，医事集会のことが述べられており，医療

の全体を視野に入れている．そのうち，看病人となろうとするものは病院で実務を積み，警察医について試験を受けた後に本職に従事するという法があること，看病尼は宗徒の一種で人の病を看護することを自己の責任とするもので，一定の試験を経なければ営業できないと紹介しており，医療職の資格認定の方法について外国の情報を得ている．

さらに田代の周辺にはその後の日本の看護の発展を促すことになる看護への注目者，看護の啓蒙者，看護教育の実践者がいる．医学所で同期に学んだ太田雄寧はアメリカの薬学書から看護の章を翻訳し『看護心得』として明治10年に発行している．また『東京医事新誌』を発刊し，明治10年代にアメリカの看護学校をいち早く日本に紹介した[56]．適塾・医学所で同期であった軍医足立寛は日赤篤志看護婦人会の育成を行い，看護教程も著している[57]．石黒忠悳は医学所同期で陸軍軍医となり，日赤の社長をつとめ，日赤の看護教育に多大の貢献をしている[58]．成医会の創設を通じて知り合った高木兼寛は英国医学に基づく看護婦の養成にいち早く着手し，明治18年にわが国で最初の看護学校を創設した[59]．田代の新知識としての看護学への注視，翻訳看護書の出版という出来事が田代の周囲にいた彼らに無影響だったとは考えにくいのである．

(3) 近代看護学導入に際しての幕末・維新期の適塾・医学所の役割

明治初期の文明開化に向かう時代に西洋医学にもとづく医療における看護の力に最初に注視したのは，幕末・維新期に緒方洪庵の適塾で蘭学を学び，江戸の医学所で西洋医学を学んだ，実践的な外科医でありかつ教育者であった田代基徳である．

田代基徳の経歴から彼の学んだ「適塾」と「医学所」の存在が大きな役割を果たしていることがわかる．適塾での緒方洪庵との出会い，洋学の修得と同門の人脈，特に英学塾の主宰者福澤諭吉とは同郷・同門であり親交があったこと，そして医学校兼病院でのウィリスの英国医学との接触，私塾修文舎での学徒との医学の新知識に関する討論などの条件が整わなければ，明治最初の翻訳看護書は明治7年の段階では出現しなかったであろう．

緒方洪庵の適塾は近代日本の多くの分野の先駆者・開拓者を生み出しており，適塾門下生のなかでも，大村益次郎，武田斐三郎，渡辺卯三郎，佐野常民，杉亨二，大島高任，橋本左内，長与専斉，福澤諭吉，野村文夫，高松凌雲などが有名である[60]．医学関係者が多くなっているが，今回の研究による田代基徳，そして田代の近くにいた福沢諭吉の存在により，適塾は近代医学のみならず，同時に近代看護学の萌芽をも担う人材を育成・輩出したのである．

従来の日本看護史では近代看護は明治期の横浜軍陣病院・大病院の看護人の存在から始められていて，それ以前にあった幕末・維新期の大阪の適塾，江戸の幕府医学所の存在，役割，教育内容，人材に看護史の観点から注目することはなかった[61]．今回の田代基徳の『看病心得草』の研究から，幕末・維新期の適塾，医学所の存在は日本看護史における近代看護学への注視・導入の観点からみて重要な意味をもつものであることが明らかとなった．

謝　辞

本研究をまとめるにあたり，資料の紹介や閲覧にご協力いただいた日本歯科大学医の博物館樋口輝雄先生，前北里大学東洋医学研究所医史学研究部の天野陽介先生に深く感謝いたします．

引用文献及び註

1）石原明．明治最初の看護書．絵でみる看護史（71）．看護教育 1966；7(9): 表紙

2）藤元直樹．文園雑誌（1輯（明6.6序）―5冊（明7.2序））田代家塾．幕末・明治初期雑誌目次集覧．参考書誌研究 2006；65: 44–46．第1号から30号までの記事のタイトルと著者名が掲載されており，文園雑誌の性質，内容を知ることができる．

3）医学所の前身は安政5（1858）年5月7日に神田に開設されたお玉ケ池種痘所である．11月に種痘所が焼失，翌年9月に下谷和泉橋通に移り，幕府の直轄となった．文久元年（1861）年10月25日には「西洋医学所」と改称され，医師養成の教育機関となって種

痘・解剖・教育の3科が設けられた．初代の頭取は江戸の蘭学医大槻俊斉であったが，文久2年4月病死し，後任には緒方洪庵があたり，9月12日から講義が開始された．文久3年2月25日西洋医学所は「医学所」と改称された．同年6月10日洪庵が死去すると第3代頭取に松本良順が就任した．慶應4年6月9日幕府の医学所は新政府へ引き渡され，6月26日に新政府が旧幕府医学所を復興して医学所を置いた．お玉ケ池種痘所から西洋医学所，医学所の変遷に関しては，深瀬泰旦．お玉ケ池種痘所の成立と発展．天然痘根絶史―近代医学勃興期の人びと．京都：思文閣；2002．p.13–51参照．医学所から明治2年2月の医学校兼病院，同12月の大学東校，明治4年8月の東校，明治5年8月の第一大学区医学校，明治7年5月の東京医学校，明治10年4月の東京大学医学部への変遷に関しては，東京大学医学部百年史編集委員会．東京大学医学部百年史．東京：東京大学出版会；1967.が参考になる．

4）田代の弟子宗亀六が修文舎について「我文園先生維新ノ期ニ際シ家塾ヲ東京ニ開キ」と述べている．修文舎友誼宴会姓氏録小序，医事新聞1879；13: 3

5）広告．文園雑誌．医事新聞1879；2: 37

6）定員追加，医事新聞1878；6: 34

7）医学院会員姓氏録，医事新聞1879；13: 15．明治12年の医学院会員数は394人，他に書林，薬輔，2つの器械輔も会員となっている．医学院会員姓名録（明治15年1月改正），医事新聞1882；48: 附録．このときの医学院会員数は504人，他に14の書林，薬輔，器械輔も会員となっている．

8）山口力之助編．帝国医籍宝鑑．東京：南江堂；1898．従来開業医埼玉，p.320参照．なお，以下の書籍に岡田宗の名前はみられない．『川越の人物誌』『川越大事典』『埼玉人物小事典』『埼玉県人物誌』『川越市史』『川越市史資料集』『川越市医師会50周年記念誌』『埼玉県医師会史』『入間地区医師会史』．

9）復刻埼玉県営業便覧．浦和：埼玉新聞社出版局；1977．p.28．本書は明治35年に発行された田口浪三・高柳鶴太郎編．埼玉県営業便覧．全国営業便覧発行所を復刻したものである．

10）日本医籍録（第2版）大正12年に，埼玉県川越市に「岡田健」の名前がある．住所は川越33，内児科岡田医院，明治31年生，大正元年千葉医専卒となっており，岡田宗の関係者である可能性もある．

11）島田和幸．「初学人身窮理」松山棟庵・森下岩楠訳本のオリジナル本について．日本医史学雑誌2006；52(1): 140–141

12）J.A.ドラン著．小野泰博・内尾貞子訳．看護・医療の歴史．東京：誠信書房；1978．第10章　公衆衛生と看護教育（19世紀後期），看護学校の始まり，p.271–284

13）J.A.ドラン著．12）に同じ，第10章　看護著作者，p.291．原書名は下記．
Handbook of Nursing, by Bellevue Training School, 1878.
Handbook of Nursing, by Connecticut Training School, 1879.

14）小林義直（1844–1905）については，小林義直．福山誠之館同窓会編．誠之館百三十年史（上巻）．福山：福山誠之館同窓会；1988；p.169参照．小林は田代の医学院会員である．

15）土岐頼徳（1843–1911）については，蒲原宏．解題・年表．整骨・整形外科典籍大系13．p.601–602参照．土岐は田代の医学院会員である．

16）C. Cutter, M.D. History of Rockingham and Strafford counties, New Hampshire: with biographical sketches of many of it pioneers and prominent men. http://www.ebooksread.com/authors-eng/d-hamilton-duane-hamilton-hurd/history-of-rockingham-andstrafford-counties-new-hampshire--with-biographical--dru.html（accessed 2013.2.13）

17）http://famousamericans.net/calvincutter（accessed 2012.10.13）出典はAppletons Encyclopedia, Copyright 2001となっている．

18）http://pauldargie.blogspot.jp/2007/08/history-df-carrie-cutter.html（accessed 2013.2.8）

19）添川正夫．ジョン・クラレンス・カッター先生．日本獣医史学雑誌1984；19: 1–5　カッター夫妻の墓の写真がつぎの文献に掲載されている．松沢真子．札幌農学校の忘れられたさきがけ―リベラル・アーツと実業教育．札幌：北海道企画センター；2005．口絵写真．

20）ジョン・ダフィー．網野豊訳．アメリカ医学の歴史：ヒポクラテスから医科学へ．大阪：二瓶社；2002．第9章　医師の教育・認可・地位，p.159–182参照．

21）J.A.ドラン著．12）に同じ，第8章　19世紀初期の看護・医療の発展，p.201–207，第10章　公衆衛生と看護教育，p.271参照．

22）田代信徳．（医史）田代基徳年譜（其の1）．外科1941；5(8): 698–705　田代信徳．（医史）田代基徳年譜（其の2）．外科1941；5(9): 789–797

23）芝哲夫．579 田代基徳．適塾門下生に関する調査報告．適塾1987；20: 141–147

24）川嶌眞人．田代基徳―明治初期の医学教育界・軍医界で活躍した外科医．ヴォルフガング・ミヒェル他編．九州の蘭学―越境と交流．京都：思文閣；2009．p.339–344　川嶌氏には田代に関して，田代基徳と中津．蘭学の泉ここに湧く―豊前・中津医学史散歩．大分：西日本臨床医学研究所；1992．田代基徳と中津．整形外科1997；48(10): 1398などがある．

25）杉浦いと子（1859年生．没年は1940年以降）．江戸に生まれる．明治13年より，田代基徳につき産婆学を修める．山崎元脩，桜井郁次郎につき実地の就

業をなす．明治17年産婆試験に合格．日本橋区において開業し生徒の養成をなす．明治23年杉浦看護婦会を設立する．明治33年第1回東京府看護婦試験に合格．明治34年大日本看護婦協会を設立し理事長（明治42年退任）となる．大正10年東京府看護婦会組合連合会が発会するに伴い会長に就任し，東京看護婦学校の運営に尽力する．看護婦会の重鎮の一人である．看護史研究会．派出看護婦の歴史．東京：勁草書房；1983．p.92．東京都立公文書館所蔵の東京看護婦学校関連の資料のなかに，大正6年4月付の杉浦の履歴書がある．田代の年譜が作成された昭和16年の年齢は82歳．

26）田代が創設した『医事新聞』の明治31年の号（医事新聞1898；516: 50）には雑報，田代基徳先生逝去，の記事があり，そこにおいて田代は天保13年生まれ，享年57歳となっている．また逝去した年の『中外医事新報』の田代基徳先生の記事にも，享年は57歳となっている（中外医事新報1898；434: 50）．

27）『切断要法』田代一徳訳述．慶應4年2月．覆刻版が蒲原宏監．整骨・整形外科典籍大系12．大阪：オリエント出版社；1983．に所収されている．グロスの『外科全書』（1866）の翻訳．麻酔編と手術編からなり，後者はベルナルドとリンハルトの外科書による．原書は英語であるが，医学所にあったのはオランダのサッセという人物が蘭訳して1866年に刊行した4冊ものであり，田代が翻訳したのはこの蘭訳本である．石黒忠悳．懐旧九十年．東京：岩波書店；1988．p.152．本書の解説は蒲原宏．解題・年表．整骨・整形外科典籍大系13．大阪：オリエント出版社；1983．p.591–599に詳しい．

28）『保寿新論』田中則敏抄訳．田代基徳閲．英蘭堂．国会図書館では刊年不明，となっているが，奥付に「陸軍医部海軍病院医学校」の記載があることから，慶應4年3月以降であることがわかる．註3）深瀬泰旦氏の文献の「お玉ケ池種痘所関連年表」参照．本書の原本は独逸人加亜児氏健全学となっている．全31丁．

29）『外科手術』上・下．田代基徳纂輯．島村利助．明治6年5月．ベルナルド，リンハルト，グロスなどの外科書からの抄訳と編集．上26丁，下23丁（上・下合本）．本書の解説は蒲原宏．解題・年表．整骨・整形外科典籍大系13．p.599–601に詳しい．

30）『飲食要論』上・下．有満（ユーマン）著．中村寛栗・松川修訳．田代基徳閲．蜩笑社．明治7年3月．凡例に米人有満氏の健康学中の飲食摂生論を抄訳した，と記されている．松川修は田代の医学院会員である．

31）『牛痘弁論』林義衛纂述．田代基徳閲．島村利助．明治9年．

32）『動物及び人身生理編』ウィルレム・チャンブル．ロベルト・チャンブル著．田代基徳訳．『百科全書』3．文部省．明治9年．に所収．覆刻版『文部省百科全書3』青史社．1984．文部省版『百科全書』は通計92篇の大項目主義の書籍で英書の邦訳である．原書はWilliam and Robert Chambers, “Chambers’s Information for the People”で，1833–1835年に刊行された．文部省版は1858年の第4版である．田代が翻訳したのはそのうちの“Animal Physiology-The Human Body”篇である．チェンバースの『インフォメーション』については樋口輝雄．『百科全書医学編』（明治7年文部省刊）とChambersの原本（1857）について．第111回日本医史学会総会資料（全64頁）．2010．が参考になる．

33）『造化生生新論』上・中・下．エルトン述．古矢嘉満子記．田代基徳先生閲．正栄堂．明治12年．緒言にエルトン氏はイギリス人で来日し生徒を教授した，と記されている．内容は生殖，妊娠，分娩に関するものである．古矢嘉満は田代の医学院会員である．

34）『民間養生説約：小学生用』村山義行編輯．田代基徳先生閲．惇信社．明治13年．覆刻版は，家政文献集成．続編第16冊．明治期第7．東京：渡辺書店；1970に所収．凡例に米人のカッタルとビーチェル女史の著書であるハイジンを本とし，これにわが国にある諸著書を参考に編纂したとある．飲食，衣服，住居，運動，睡眠，洗浴，眼耳歯牙，病者看護，伝染病予防の項目がある．

35）『学徒衛生運動要訣』田上耕助編輯．田代基徳閲．明治21年．田上は陸軍三等軍医で，陸軍士官学校の生徒を対象に書かれたものである．本文の前に「運動即生活　生活即運動」太楽道士題と書かれている．

36）ウィリスI.，萩原延寿．遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄　8　帰国．東京：朝日新聞社；2000．p.131．大山瑞代訳．幕末維新を駆け抜けた英国人医師―甦る「ウィリアム・ウィリス文書」．東京：創泉堂出版；2003．にウィリアム・ウィリス略年表が所収されている．

37）私塾の特徴は「支配権力とは無関係に設けられた教育機関で，民間の知識人の自宅が教場に用いられ，その属する学派・流派独自の教育方針によりながら，一般的には子弟の身分にかかわりなく自由な教育が行われた．教育内容も他の教育機関と比較して，最も幅広く先駆的なものであった」（執筆川村肇）とされる．『日本思想史辞典』ぺりかん社；2001．p.227．緒方洪庵の適塾では素読，講釈，会読の学習方法が行われていた．このうち複数の人が定期的に集まって，一つのテキストを討論しながら共同で読み合う読書・学習方法を「会読」といい，相互コミュニケーション性，対等性，結社性の三つの原理をもつとされる．前田勉．江戸の読書会―会読の思想史．東京：平凡社；2012．p.54．

38）芝哲夫，23）に同じp.144

39）田代基徳．医学院創立広告．医事新聞1878；8: 1．討議すべき科目として下記の科目が掲示されている．

解剖学，組織学，比較解剖学，胎生学，生理化学，生理学，病体解剖学，内外病理学，治療学，医学地誌，医学歴史，薬剤学，毒物学，医学断訴学，衛生学，内科，外科，軍陣医学，手術学，眼科，耳科，歯科，咽喉科，婦人科，産科，小児科，精神病科，梅毒科，皮膚病科，其他獣医科，電気治療，温泉治療等

40）田代基徳．医学院概則．医事新聞 1881；46：附録

41）医学院報告第4号．改正修文舎規則．医事新聞 1882；52: 2

42）雑報．医学教授．医事新聞 1882；52：12 （ ）内は会主名である．医事新聞の奥付より，田代が医事新聞の持主として名前が掲載されるのは明治16（1883）年の第87号までである．

43）（医史）田代基徳年譜（其の1）．杉浦いと子実話．外科 1941；5(9): 700

44）福澤諭吉．福翁自伝．福澤諭吉著作集第12．東京：慶応義塾出版会；2006．p. 241 福翁自伝の発刊は明治32年である．

45）本書は慶應義塾大学図書館に所蔵されており，中表紙に「福澤氏図書記」の朱印が押されている．この朱印は基本的には福澤諭吉がアメリカから持ち帰ってきた図書にしか押されていない．慶應義塾大学三田情報センター編．慶応義塾図書館史．東京：慶應義塾大学三田情報センター；1972．p. 26

46）松田誠．松山棟庵と成医会．高木兼寛の医学―東京慈恵会医科大学の源流．東京：東京慈恵会医科大学；2007．p. 752

47）山岡洋一．15年に数千点―明治初期の大翻訳時代（翻訳についての断章）．翻訳通信 2004；第2期 22: 1–3

48）手塚龍麿．東京の英学（東京都史紀要16）．東京：東京都総務局文書課；1959．p. 79

49）石出猛史．病体解剖社．千葉医学 2002；78: 7–14

50）（医史）田代基徳年譜（其の2）．杉浦いと子実話．外科 1941；5(9): 793

51）蒲原宏．日本整形外科史における田代義徳先生―その父たるものの条件．整形外科 1975；26(10): 901–906

52）司馬遼太郎．胡蝶の夢2．司馬遼太郎全集第41巻．東京：文芸春秋；1983．p. 311

53）明治8・9年に再刻された田代一徳訳述『切断要法』に付されている「英蘭堂発刊書目録」による．蒲原宏監．整骨・整形外科典籍大系12．大阪：オリエント社；1983．p. 281–291

54）（医史）田代基徳年譜（其の2）．杉浦いと子実話．田代塾の東京産婆会．年譜には年不詳となっているが，明治11年から明治13年の間に記されている．外科 1941；5(9): 794

55）田代基徳識・林源八郎記．欧州医制略説．医事新聞 1882；50: 17–22

56）太田雄寧（1851–1881），医師の長男として出生，医学所で松本良順に師事して西洋医学を学ぶ．明治5（1872）年，アメリカに留学して化学，製薬学を学び帰国後は『東京医事新誌』を創刊，欧米の『薬物鑑法』『新式化学』などの翻訳書を出版している．彼はグリフィスの『一般処方集』（第3版）の一部を翻訳し，明治10年『看護心得』として出版した．樋野恵子．明治初期における医療の一分野としての看護―医師太田雄寧訳纂『看護心得』の原著解明と比較検討．日本医史学雑誌 2008；54(4): 373–386

57）足立寛（1842–1917），遠江国出身．福澤諭吉に蘭学を学んだ後に適塾に入門，緒方洪庵を追って西洋医学所，医学所に学ぶ．明治8年陸軍2等軍医正，同17年陸軍2等軍医正兼東京大学教授，19年陸軍軍医学舎教官となり軍陣外科学を講義，20年日本赤十字社篤志看護婦人会を興し，その講師となる．多数の医書を刊行しているが，『日本赤十字社篤志看護婦人会教程』は数回出版し，看護教育に貢献した．土屋重朗．静岡県の医史と医家伝．1973．適塾門下生番号は607番である．

58）石黒忠悳（1845–1941），越後出身．江戸の医学所で西洋医学を学ぶ．明治4年，兵部省に入り軍医となる．ドイツで医学を学ぶ．陸軍軍医総監，陸軍医務局長に就任，草創期の軍医制度を確立．日本赤十字社篤志看護婦人会の発足に尽力．明治43年ナイチンゲール・石黒記念牌（銀製の記章）を日赤本社に寄付．大正6年日赤社長に就任．看護婦の地位の向上に寄与し続けた．亀山美知子．近代日本看護史Ⅰ日本赤十字社と看護婦．東京：ドメス出版；1983．

59）高木兼寛（1849–1920），海軍軍医，医学教育者．鹿児島医学校でウィリスに学ぶ．英国セント・トマス医学校に留学．明治13年に帰国後，成医会講習所，有志共立東京病院，看護婦教育所（明治18年）を創設．海軍での脚気撲滅に尽力．看護婦教育所はわが国で最初の看護婦訓練学校である．明治20年英国セント・トマス病院に日本人看護婦2名を留学させる．松田誠．高木兼寛の医学―東京慈恵会医科大学の源．東京：東京慈恵会医科大学；2007．全1100頁．本書に田代基徳は9回出てくる．それらは成医会，有志共立東京病院，慶應義塾医学所，医学会社，緒方洪庵関係の記事である．『医事新聞』には病体解剖社での高木による解剖，成医会例会の記事があり，医学院会員名簿にも高木の名前があり，両者に親密な交流があったことがわかる．

60）中田雅博．緒方洪庵―幕末の医と教え．京都：思文閣出版；2009．附属資料として「適塾の門下生一覧」が p. 321–380 に所収されている．全部で636人の門下生には入門順に番号が付され，田代は579番となっている．

61）看護史研究会編．看護学生のための日本看護史．東京：医学書院；1989．近代 1．明治初期の医療と看護 わが国最初の女性看病人．p. 68–69

Kanbyo Kokoroegusa, Edited by Tashiro Motonori (1874): Analysis and Significance of the First Translated Nursing Text of the Meiji Era

Machiko HIRAO

Department of History of Medicine, School of Medicine, Juntendo University, Tokyo

Kanbyo Kokoroegusa (*Notes on Experiences with Nursing*) (1874) is known as the first text on nursing that appeared in the Meiji Era in Japan. Although it was long believed that the original text was no longer extant, recent research has discovered that the text has been kept at the National Diet Library. According to the record by Tashiro Motonori (1839–1898), who was a student of Ogata Kōan at Tekijuku in Osaka and who later studied Western medicine at the shogunate institute of medicine in Edo, *Kanbyo Kokoroegusa* was published as a supplement to the fifth volume of the *Bun'en zasshi*, the first medical journal issued in Japan. The examination of the text has revealed that it was a translation of "Directions for Nurses," the 49th chapter of *A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene* by Calvin Cutter (1852). This discovery reinforces the significance of Tekijuku and the shogunate institute of medicine for the history of nursing in Japan, especially from the viewpoint of introducing the modern idea of nursing science.

Key words: History of Nursing, *Kanbyo Kokoroegusa*, Tashiro Motonori, Translated nursing text, Meiji Era